

谷川雁の反定型音響  
- 「工作者」のダイナミズムについて -

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2021-05-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 羅, 皓名 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10291/21815">http://hdl.handle.net/10291/21815</a>

## 「博士学位請求論文」審査報告書

審査委員（主査） 政治経済学部専任教授

氏名 丸川 哲史 ㊞

（副査） 政治経済学部専任教授

氏名 本間 次彦 ㊞

（副査） 法学部専任教授

氏名 岩野 卓司 ㊞

（副査）

氏名 平井 邦一 ㊞

1 論文提出者 羅 皓名

2 論文題名 谷川雁の反定型音響——「工作者」のダイナミズムについて——

（英文題） The Anti-Form of Sound in Tanigawa Gan: On the Dynamism of “Operator”

### 3 論文の構成

第一章「原詩」という音源へ向かう 17

1.1 「辺境」からの「反」知性 17

1.2 エネルギーの場としての二重的大衆 20

1.3 立体視聴覚の生成：台湾に伏流するテント芝居の糸口から 23

1.4 「反」する工作者 35

1.5 工作者の文体 40

1.6 「無」のノイズ 42

小結 46

第二章 内的リズムと工作者のモチーフ：「日本の歌」を中心に 47

2.1 安保のリズムと日本の歌	47
2.2 リズムとリトルネロ，宇宙から原点へ——『千のプラトール』との接点	50
2.3 モチーフとしての原詩	59
小結	64
第三章 工作者の導音：日高六郎と谷川雁	68
3.1 昭和十八年秋の第九交響曲	68
3.2 戦争と「精神」	75
3.3 日高六郎のベルグソン研究	82
3.4 動機と行動における「参加」の全面性	93
3.5 工作者を生み出すざわめき：日高六郎における知識人批判	102
3.6 「媒介者」と「工作者」	108
小結	117
第四章 「主旋律」と「低音」の間に挟まれる工作者	118
4.1 戦後の「荒地」から響き始まる主旋律	118
4.2 「工作者論争」をめぐって	133
4.3 「原型」と「原点」：低音部のメリハリについて	155
小結	172
終章	174
5.1 脈絡の補遺	174
5.2 共鳴するための終止符を	179

#### 4 論文の概要

本論は日本の新左翼運動に大きな思想的インパクトを与えた詩人でありかつ思想家であった谷川雁（1923-1995）が遺したテキストにおける論理構造と思想脈絡を独自の方法で解読することによって、その思想のダイナミズムとモチーフを解明することを目的としたものである。その際の問題角度として、特に谷川思想における「音響的」思考論理の存在を検証せんとした。また本論では、この検証を行った上で、谷川による思想の「定型」を拒否する論理について、他の時空における思索と連結させていったあり様を詳細に展開した。

本論は二部構成、また計五章により論を展開されている。第一部は、振動（vibration）

と命名されている。ここでは、谷川雁の思想の内部におけるダイナミズムを取り出す作業を行い、その中で主に、その思想における「音響的」思考論理のあり様を検証している。

第二部においては、第一部で聴き取ってきた音響をより広いフィールドにおいて、時間的縦軸と思想類型の横軸において参照点となる別の思想体系に反射させることにより、谷川雁の思想の音響性の様相を究明し、その音響を定位する作業を行った。異なる思想の間の相互作用に注目するために、音響論の文脈において使われる用語として干渉 (interference) という用語を用いた。

最終章では、これまでの論旨の展開を受け、まとめを行なっている。これまで展開した「音響論」を踏まえつつ、谷川雁の行動様式として「遊撃隊(ゲリラ)」的な思想要素に関して、その可能性についてまとめている。

## 5 論文の特質

審査のプロセスの中で浮かび上がった、本論文の評価に値する特質として、主に以下の四点が提出された。

- (1) 本論文は、ジル・ドゥルーズなどフランスの現代思想を用いながら、谷川雁の遺した仕事を「音響論」の角度から論じた研究である。このような谷川雁へのアプローチは、今まで皆無に近いものであった。従来の研究は、サークル運動を主宰した社会活動家としての谷川雁に対する実証的研究、また詩人として活躍していた時期の谷川雁についての詩の評価にかかわる研究が一般的であったが、本論文は、そのような谷川雁研究に一石を投じたこととなる、との評価が為された。
- (2) 谷川の思想が形成される中で、日高六郎という思想家との関わりが非常に強いことが立証されたが、この点もこれまでの研究ではあまり触れられてこなかった部分である。日高は、谷川よりも年下なのだが、かつて戦前においてドイツ軍が駐留したこともある中国の青島で過ごし、そこでの日本人(軍人関係)への観察もあったことから、国際関係について鋭敏な感性をもっているとともに、ベルクソンなど、欧米の先進的な理論や思想を身に着け、後の言論界でも活躍する人物であった。谷川雁の思想形成においてはもちろん、戦後における日本社会を如何に革新するかという議論でも活躍した人物である。本論文において、そのような日高の存在が谷川にとって非常に大きいものであったことが証明されることとなった。

- (3) 丸山眞男も、日本の戦後思想の中で大きな存在であったが、丸山と谷川の間で生じた、「音響」を比喻として扱った議論、日本社会をどのように批評するかという点において、二人の論を比較する中で新鮮な論点が提出された。それは端的に、丸山の有名な「古層」論、あるいは「執拗低音」論である。谷川の「音響」論は、丸山の立論に対する批評として有効性を持つものと本論文は主張しているが、納得できることが多い。丸山の論は、一つの説明原理としてあったが、谷川の論は、現状への介入の角度から、「工作者」あるいは「媒介者」の実践において引き寄せられるものであった。以上のような両者の「音響」を比喻とした思想の対比については、これまでほとんど触れられていなかった領域であり、評価できる。
- (4) その他、論文の筆者が台湾出身であることに関連づけて、古代より湿地帯の多い東アジア地域において急激に銃鉄技術(近代兵器も含む)が近代以降に導入され、そして根を張っていった事情を「音」として聞いたもの、とする評価があった。即物的には、湿地帯の比喩的昇華としての「泥」と新しい技術として発明された「鉄」とが出会ったとしても「音」は出にくいものである。が、本論文はむしろ谷川雁研究の道筋の中でその「音」を聞き取ったものとして評価できる、ということである。この評は、多分に文学的含意の溢れるものであったが、他の評者、筆者にとっても納得できるものであった。

ただし、以下の点については、今後の研究の中で深めてもらいたいとの要望がなされた。

- (1) 谷川の前期とも呼べる、詩作をもっぱらとしていた時期の詩、特にその「隠喩」の機能について分析が出されていないのではないか、という指摘。
- (2) 第一部で展開されたところの具体的な「音響論」の展開が丸山眞男や日高六郎との関係で(特に日高との関係で)は十分に生かされていないのではないか、という指摘。
- (3) 「イマージュ」という概念の取り扱いに関して。フランス現代思想からの流れで、どのように扱っているのか必ずしも明確ではない、という指摘。
- (4) 丸山眞男の「執拗低音」はもちろん比喻としてあって、これまでの展開してきた「音響論」として文脈づけるのには無理があるのではないか、という指摘。

- (5) 論文で扱われている「音響」がいわゆる音楽でも、歌でも、詩文でもないことは了解できるが、もしそれが比喩ではなく、また聴き取れるような音響現象ではないとしたら、どういう意味を孕んでいるのか、より明確な説明が必要である、との指摘。
- (6) 批評家平岡正明が、谷川の「音響論」について、ジャズに引き付け継承したと言える。その応接の中で、「今日的な段階の基調」という言葉がある。これは、1960～70年代に向かう両者の執筆時点においては高度に発達した産業資本主義だったと思われる。この点が本論文ではやや曖昧である。現在の状況に引きつけて、筆者はどう考えているのか、という問題提起。

以上のような、貴重な問題点が審査のプロセスの中で指摘されることとなった。結果として、修正の中で以上の数点について、短い期間においてできる限りのところで改善の方向が示された。また最終審査報告会の中においても、当該院生から上記の質問一つ一つに対して、完全にクリアなものではなかったが、応答の中で、これまで為された努力の痕跡が見受けられた。今後の本人の研究の発展において、以上の指摘が活かされていく方途が見えたと言える。

## 6 論文の評価

所定の事前審査の結果、本学位請求論文は、本審査の対象としての内容を備えているものと判定され、さらに本審査の結果、学位請求に値する論文であるとの評価が審査員の一致した見解として示された。

## 7 論文の判定

本学位請求論文は、教養デザイン研究科において必要な研究指導を受けたうえ提出されたものであり、本学学位規程の手続きに従い、審査委員全員による所定の審査及び最終試験に合格したので、博士（学術）の学位を授与するに値するものと判定する。

以 上